

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 7 日現在

機関番号：25403

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23320161

研究課題名(和文) グローバル・ヒストリーとしての平和研究にむけて アウシュヴィッツとヒロシマの記憶

研究課題名(英文) Toward the peace studies as global history: memories of Auschwitz and Hiroshima

研究代表者

竹本 真希子 (Takemoto, Makiko)

広島市立大学・付置研究所・講師

研究者番号：50398715

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 7,200,000円、(間接経費) 2,160,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題は、第二次世界大戦後の世界史において、被爆都市「ヒロシマ」の情報が世界各国にどのように広まり、どのように記憶されてきたかを問うと同時に、従来の個別ないし各国別の平和運動史を越えて、「記憶の歴史学」の手法による新しい戦後世界史(グローバル・ヒストリー)を構想したものである。とくに著書『灰燼の光』でヨーロッパにヒロシマを紹介したユダヤ系のジャーナリスト、ロベルト・ユンクに焦点を当て、ヒロシマの記憶の受容史と戦争の記憶化プロセスの特質をドイツ語圏の都市の例から分析した。

研究成果の概要(英文)：This project aimed to analyze how the information about "Hiroshima", the first city hit by an a-bomb, spread and how it is still commemorated around the world. At the same time our project sought a new global history after 1945 and analyzed the peace movement not at the national level but from a transnational and global perspective. It focused especially on the case of the Jewish journalist Robert Jungk who reported on Hiroshima to Europe in the late 1950s in his book "Children of the Ashes". The project revealed one process of the globalization of Hiroshima from the relationship between Jungk and Hibakusha in Hiroshima. The project also analysed the acceptance and features of the process of the memorization of Hiroshima in several German-speaking cities.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・西洋史

キーワード：ドイツ 原爆 戦争 平和 記憶

## 1. 研究開始当初の背景

本研究課題のテーマは、平和運動史研究と「記憶の歴史学」の交差点に位置する。ドイツ語圏の平和運動に関する歴史研究の重点は、これまでのところは、ズットナー、オシエツキー、クヴィッデなど代表的な平和主義者を中心とし、第二次世界大戦以前の知識人の平和運動や平和思想の分析におかれてきた。1980年代初頭のヨーロッパの反核運動の高まりの中で発足した「歴史平和研究ワーキング・グループ」により「歴史平和研究」の組織的な体制が築かれたが、ここで第二次世界大戦後の平和運動がテーマとして取り上げられた場合でも、研究はヨーロッパを中心とした各国の個別運動の事例報告にとどまり、相互のつながりや、底流する平和意識・平和感情の問題など、とりわけ第二次世界大戦の「記憶」という問題への視点を欠いていた。しかし1945年以降の平和運動を国際的レベルで検討する場合、個別の運動の根底において、アウシュヴィッツとヒロシマの記憶がどのように受容され、かつ消化されていたのか、この問題の検討を欠かすことはできないはずである。

この点で、個別の平和運動の政治・社会的な分析を越えて、戦後世界史として平和運動史を把握するためには、「記憶の歴史学」の方法が固有の役割を果たさうだろう。なぜなら「記憶の歴史学」の方法は、1945年以降、国際的レベルで共有されていく平和意識を、地域から把握していくことができるからである。研究代表者および分担者は、このようにして、これまでの平和運動史研究の蓄積のうえに、いわば現代世界の平和への「聖地」とも言うべきヒロシマを居所とし、この「歴史の場」の記憶を軸におく、現代世界史・平和思想史の構想に至った。

## 2. 研究の目的

上記のような背景から、本研究は、第二次世界大戦後の戦後世界史において、被爆都市「ヒロシマ」の情報が世界各国に、どのように広まり、どのように記憶化されてきたのかを問うことを目的とした。この課題に答えることは核兵器なき世界への展望が語られ始め、同時に人類が核エネルギー（原子力）とどう向き合うかが問われている今日、歴史家の国際的な責務と言ってよいであろう。本研究はこれを平和意識との関連で検討することを目指したものである。

本研究は同時に研究の対象をドイツ語圏に置き、代表的な都市を抽出して、各地で「ヒロシマ」と「アウシュヴィッツ」がどのように記憶化され、関連付けられてきたか分析し、これにより戦争の記憶化プロセスを地域レベルで解明し、歴史平和研究の方向性を提示することも課題とした。また、ドイツ語圏におけるヒロシマの記憶の受容史と同時に、そ

の平和意識の歴史的特質についても、本研究において解明すべき問題として取り組むこととした。

## 3. 研究の方法

上記の研究目的を達成するために、本研究課題では、第一に「ヒロシマ」に関する英訳史料の整理、分析を行った。この史料「小倉文書」は、ユダヤ系でドイツ出身のジャーナリストであるロベルト・ユンクが1950年代に広島を訪れ、その後『灰墟の光』を執筆した際に参考にした史料である。ユンクの広島取材を助けた小倉馨（のちに広島平和記念資料館館長を務めた）によってユンクに送られた広島に関する情報であった。ユンクの『灰墟の光』は、広島の被爆者と復興の状況を世界に伝え、「サダコと折鶴」の物語を広めるきっかけをつくるなど、ヒロシマ情報の世界化と記憶化に大きな役割を果たした。ユンクはまた、ドイツ語圏を中心としたヨーロッパにおける反原発・反原発運動の主要な担い手でもあり、ユンクの著作と活動自体が、ヒロシマと核エネルギーのヨーロッパでの受容を分析する材料となりうるものであった。そのため本研究プロジェクトでは、これまで十分明らかにされていなかったユンクのヒロシマおよび日本取材の背景の調査を、当時を知る人々にインタビューをとりながら行った。

本研究では同時に、もうひとつの研究対象であるドイツ語圏の都市の戦争の記憶について、ベルリン、ウィーン、フランクフルト・アム・マイン、ドレスデンの現地調査を行った。各地にある戦争やヒロシマ関連の記念碑、各都市とヒロシマとの関係を調査したほか、ヒロシマ情報の伝播と記憶化の具体例について検討した。個々の研究の進展を保証するため、広島を中心として研究会を頻繁に開催し、議論を深めた。

## 4. 研究成果

本研究の最も大きな成果は、広島平和記念資料館との共催で2013年2月から3月にかけて同館で行ったロベルト・ユンク生誕100周年記念資料展「ヒロシマを世界に伝える核の被害なき未来を求めて」である。ユンクの生涯を追いながら、彼の広島との関わりを中心に解説したパネル展示を行うことで、広く一般に研究成果を公開することができた。同展はさらに、2013年6月に大阪大学豊中キャンパスで開催された日本平和学会春季研究大会で展示されたほか、同年7月には佛教大学紫野キャンパスで、2014年4月から6月にかけて福島県白河市のアウシュヴィッツ平和博物館で、同年5月から6月にかけては立命館大学国際平和ミュージアムで新しい資料も加えて公開された。この展示をさらに発展・拡大させ、2014年10月から12月に

かけて「越境するヒロシマ ロベルト・ユンクと原爆の記憶」(仮題)を東京大学ドイツヨーロッパ研究センターと東京大学駒場博物館との共催で、同館にて開催する予定である。またユンクに関しては、下記の学会・研究会報告のほかに、子息のペーター・シュテファン・ユンク氏(作家・パリ在住)を招聘して、2014年2月26日に明治学院大学国際平和研究所で、また同年3月1日には広島平和記念資料館で、市民向けの講座も開催した。これにより、ユンク来日時を知る関係者から情報を得ることができ、ユンク研究がより発展する可能性がでてきた。さらにヒロシマ研究のネットワーク構築を目的とし、ユンク展に関連して作成したパンフレットを国内外の歴史・平和・原子力研究者等に送付し、反響を得た。

「小倉文書」の刊行については、現在作業を進めているところである。広島の被爆者が抱えていた問題や1950年代までの街の復興の様子を示す貴重な資料でもあるため、慎重に分析し、できるだけ早い段階で公開したいと考えている。

ユンクと並ぶ研究対象であるドイツ語圏の戦争の記憶とヒロシマの受容および平和運動史については、2014年3月に広島市立大学で開催された西日本ドイツ現代史学会第24回大会におけるシンポジウム「核の時代におけるヒロシマ」で、研究代表者と分担者がそれぞれ担当する時代・地域について報告を行い、ドイツ史研究者を中心とした参加者と意見交換を行った。

その一方で課題も残っている。本研究においては、これまであまり取り上げられることのなかったドイツ語圏におけるヒロシマの記憶化の具体例を調査することができたが、時代ごと都市ごとの特性を捉えるためには、さらなる調査が必要である。同時にアウシュヴィッツの記憶化については、ユンクをめぐって「アウシュヴィッツとヒロシマ」の共通性に言及する例が見られたものの、十分に検討できたとはいえない。戦争の記憶とともに「核エネルギーの表象」であるヒロシマのあり方も同時に検討する必要があったため、現段階では「ヒロシマの記憶」を重視し、ドイツ語圏の各都市におけるアウシュヴィッツとヒロシマ双方の記憶化を分析するまでには至らなかったのである。これらのテーマについては、今後の課題としたい。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 14 件)

竹本真希子、「ヴァイマル共和国期の急進的平和主義者にとっての軍縮と平和 『ヴェルトビューネ』の記事から」、専修史学、2014年、(14)-(31)頁、査読無

木戸衛一、「ドイツにおける極右の現状 日常的暴力の背景に『思考停止を求める政治』と『格差と貧困』」、アジア記者クラブ通信、250号、2013年、13-15頁、査読無

木戸衛一、「ドイツ総選挙と左翼党」、科学的社会主義、第188号、2013年、56-64頁、査読無

KIDO, Eiichi, "Vorwärts ins 19. Jahrhundert? Japan soll interventionsfähig werden", Wissenschaft und Frieden, Nr.4, 2013, S.14-17、査読無

北村陽子、「現代ドイツ・スイス・ネーデルラント」、史学雑誌、122巻5号、2013年、368-375頁、査読無

若尾祐司、「反核の論理と運動：ユンクとアンデルスの交差」、二十世紀研究、第14号、京都大学学術出版会、2013年12月、1-28頁、査読無

竹本真希子、「ロベルト・ユンクと日本」、広島ジャーナリスト(日本ジャーナリスト会議広島支部)第12号、2013年、96-101頁、査読無

木戸衛一、「ドイツ政治と左翼党」、科学的社会主義、175号、2012年、6-15頁、査読無

木戸衛一、「大阪空襲訴訟について」、書評(関西大学生協)第137号、2012年、184-188頁、査読無

KIDO, Eiichi, "Neuer Graswurzel-Chauvinismus in Japan", Antifaschistisches Infoblatt, Nr.94, 2012, S.54f、査読無

木戸衛一、「ドイツにおける<脱原発> その背景、成果と課題」、大阪経済法科大学21世紀社会研究所紀要、第3号、2012年、1-13頁、査読無

北村陽子、「第二帝政期ドイツにおける『母性保険』構想の展開と限界」、社会科学(同志社大学人文科学研究所)42巻1号、2012年、223-245、査読有

北村陽子、「近代ドイツにおける戦時女性動員と社会活動の形成」、社会科学(同志社大学人文科学研究所)41巻1号、2011年、149-173頁、査読有

北村陽子、「第二次世界大戦期ドイツにおける戦争障害者の職業教育について」、「子ども」の保護・養育と遺棄をめぐる学際的比較

史研究・ディスカッションンペーパー、Web  
版第2号、2011年、35-39頁、査読無、DOI：  
http://hdl.handle.net/10236/7193

〔学会発表〕(計 10 件)

北村陽子、「銃後と女性」(シンポジウム  
第一次世界大戦研究の到達点と展望 日本  
におけるドイツ近現代史研究者の視点から)、  
ドイツ現代史学会第 37 回大会、於：駒澤大  
学、2014年9月20日(発表確定)

北村陽子、「戦争犠牲者の支援と女性の役  
割」(シンポジウム 第一次世界大戦と女性  
生と死をめぐって)、イギリス女性史研究  
会第 22 回研究会、於：甲南大学、2014年7  
月13日(発表確定)

竹本真希子、「ロベルト・ユンクと日本  
ユンク生誕 100 周年記念資料展によせて」、  
日本平和学会関西地区研究会、於：立命館大  
学、2014年5月31日

竹本真希子、「ドイツの反核平和運動とヒ  
ロシマ」(シンポジウム 核の時代における  
ヒロシマ)、西日本ドイツ現代史学会第 24 回  
大会、於：広島市立大学、2014年3月28日

若尾祐司、「1960年代前半ドイツ語圏の復  
活祭行進運動：Robert Jungk を中心に」(シ  
ンポジウム 核の時代におけるヒロシマ)、  
西日本ドイツ現代史学会第 24 回大会、於：  
広島市立大学、2014年3月28日

木戸衛一、「東ドイツとヒロシマ」(シンポ  
ジウム 核の時代におけるヒロシマ)、西日  
本ドイツ現代史学会第 24 回大会、於：広島  
市立大学、2014年3月28日

北村陽子、「フランクフルトから見たヒロ  
シマ」(シンポジウム 核の時代におけるヒ  
ロシマ)、西日本ドイツ現代史学会第 24 回大  
会、於：広島市立大学、2014年3月28日

TAKEMOTO, Makiko, “ “Kein Euroshima! ”  
Der Einfluss der deutschen  
Protestbewegung auf die japanische  
Anti-Atombewegung“, Arbeitskreis  
Historische Friedensforschung,  
Forschungsstelle für Zeitgeschichte in  
Hamburg, 18.10.2013

若尾祐司、「反核の論理と運動 R.ユン  
クと G.アンデルスの交差」、西日本ドイ  
ツ現代史学会第 23 回大会、於：東亜大学、  
2013年3月30日

竹本真希子、「20世紀ドイツにおける「平  
和」と平和運動」、西日本ドイツ現代史学会  
第 22 回大会、於：鹿児島大学、2012年3月

31日

〔図書〕(計 7 件)

北村陽子ほか 14 名、『現代の起点 第一次  
世界大戦 第 2 巻 総力戦』(北村陽子「寡  
婦の戦争」)、2014年、岩波書店、272頁

北村陽子ほか 11 名、『保護と遺棄の子ども  
史』(北村陽子「世界大戦期ドイツの戦争障  
害者をめぐる保護と教育」)、昭和堂、2014年、  
352頁

KIDO, Eiichi, “Wohin treibt Japan?  
Lehrunfähige Nation?“, Gyoergy Szell,  
Roland Czada (Hr.), Fukushima: Die  
Katasrophe und ihre Folgen, Peter Lang,  
2013, 292.

木戸衛一、『ドイツ左翼党の挑戦』、せせら  
ぎ出版、2013年、62頁

若尾祐司・本田宏(編)、『反核から脱原発  
へ ドイツとヨーロッパ諸国の選択』(若  
尾祐司「反核の論理と運動 ロベルト・ユン  
クの歩み」)、昭和堂、2012年、395頁

若尾祐司・本田宏(編)、『反核から脱原発  
へ ドイツとヨーロッパ諸国の選択』(竹  
本真希子「一九八〇年代初頭の反核運動  
『ユーロシマ』の危機に抗して」)、昭和堂、  
2012年、395頁

若尾祐司・本田宏(編)、『反核から脱原発  
へ ドイツとヨーロッパ諸国の選択』(北  
村陽子「フランクフルト・アム・マインにお  
ける反原発市民運動」)、昭和堂、2012年、395  
頁

〔その他〕(計 5 件)

ニューズレター記事：竹本真希子、「ロベ  
ルト・ユンクが広島に伝えたもの」、  
Hiroshima Research News (広島市立大学広  
島平和研究所)、Vol.15、No.2、2013年、2-3  
頁

ニューズレター記事(の英語版)：  
TAKEMOTO, Makiko, “Robert Jungk’s  
Message to the People of Hiroshima: On the  
Occasion of the Special Exhibition on  
Robert Jungk”, Hiroshima Research News  
(Hiroshima Peace Institute), Vol.15, No.2,  
2013, pp.2-3

展示パンフレット：ユンク科研グループ作  
成(竹本真希子、若尾祐司、木戸衛一、北村  
陽子、小倉桂子)、ロベルト・ユンク生誕 100  
周年記念資料展関連資料「ヒロシマを世界に  
伝える 核の被害なき未来を求めて」、2013

年、改訂版 2014 年、16 頁

展示パンフレット( の英語版): Jungk Kaken Group (TAKEMOTO, Makiko / WAKAO, Yuji / KIDO, Eiichi / KITAMURA, Yoko / OGURA, Keiko), Special exhibition for the centenary of Robert Jungk: The Man who told the world about Hiroshima. For a nuclear-free future, 2013, 16

インタビュー: KITAMURA, Yoko, (Interview) Jedes Jahr um die halbe Welt, Hundert. Das Jubiläumsmagazin der Deutschen Nationalbibliothek, Heft 4, 2012, S.12-13、

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

竹本 真希子 (TAKEMOTO, Makiko)  
広島市立大学・付置研究所・講師  
研究者番号: 50398715

### (2) 研究分担者

木戸 衛一 (KIDO, Eiichi)  
大阪大学・国際公共政策研究科・准教授  
研究者番号: 70204930

北村 陽子 (KITAMURA, Yoko)  
愛知工業大学・工学部・准教授  
研究者番号: 10533151

若尾 祐司 (WAKAO, Yuji)  
放送大学・愛知学習センター・特任教授  
研究者番号: 70044857